

加賀の守護

富樫氏の歴史と遺跡



石川中央都市圏歴史遺産活用連絡会

【目次】

1. 加賀国守護 富樫氏の歴史
2. 富樫氏の館 富樫館跡 押野館跡
3. 富樫氏の城 高尾城跡
4. 富樫氏の墓 御廟谷・富樫晴貞墓地
5. 富樫氏の家臣 槻橋氏の城館跡
6. 伝富樫政親の終焉の地 倉ヶ岳城跡
7. 富樫氏関連遺跡など（野々市市エリア）
8. 富樫氏関連遺跡など（金沢市以北エリア）

※表紙写真「居城高尾城跡から望む」（金沢市伏見台公民館提供）

※表紙のイラストは富樫家通、作・富樫氏頌徳会、画・宮前洋介氏『八曜の剣 加賀・富樫氏の物語』2016年より



富樫家国像（野々市市文化会館前）

1. 加賀国守護

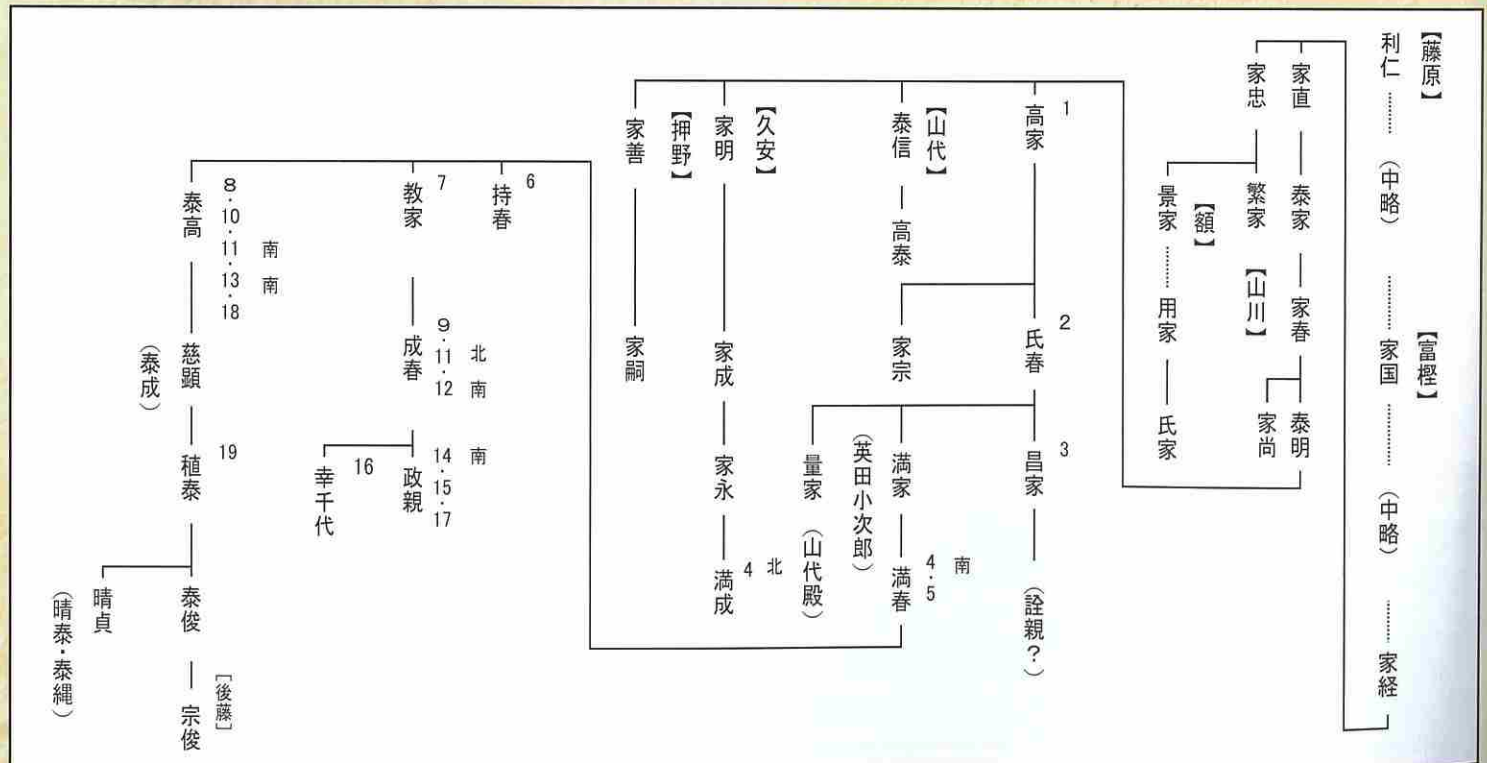
富樫氏の歴史

【富樫氏の概説】 富樫氏は、藤原利仁の流れをくむ加賀斎藤氏の一族で、野々市市と金沢市を流れる高橋川中流域の富樫郷を拠点としていました。利仁から7代の家国が「富樫介」を称したことが富樫氏の始まりとされ、康平6年（1063）には野々市に館を築いたとも伝えられています。

同じ斎藤氏の一族で先に勢力を強めていた林氏の嫡流が、承久3年（1221）の「承久の乱」で朝廷方につき衰退したことから、幕府方であった富樫氏は加賀における武士団の筆頭となり、守護を歴任する北条氏一門の代官を務めました。その後、富樫高家は南北朝内乱期の戦功から、建武2年（1335）加賀国の守護に任じられました。高家は守護所を野々市に置き（富樫館）、政治を行ったと考えられます。

嘉吉元年（1441）、富樫教家が將軍の怒りに触れ失脚したことを発端に富樫氏の分裂が始まり、長享2年（1488）加賀の一向宗門徒と一族の富樫泰高の攻撃によって守護富樫政親は敗北し、政親の居城である高尾城は落城しました。

戦国期には、富樫泰高が加賀国の守護職を引き継ぎますが、実権は一向宗門徒がもち、富樫氏の勢力は衰えていきました。元亀元年（1570）守護富樫晴貞は、金沢市の伝燈寺で一向宗門徒に討たれ、富樫氏は滅亡しました。富樫館はこれ以降に廃絶していったと考えられます。



富樫氏略系図（数字は加賀守護の順、北は北半国、南は南半国守護）『野々市町史 通史編』2006年より

富樫氏の略年表

年号 (西暦)	富樫氏に関係する主な出来事	日本史の主な出来事
延喜 15 年 (915)	富樫氏と林氏の祖先である藤原利仁、鎮守府将軍に着任	
康平 6 年 (1063)	富樫家国、野々市に館と神社 (現在の布市神社) を建立 「富樫介」を名のり天皇家や公家の警護として仕える	
治承 4 年 (1180)		源頼朝・木曾義仲、平氏追討のため拳兵 (治承・寿永の乱)
寿永 2 年 (1183)	富樫家経、北陸道を南下する木曾義仲の軍に加わり、俱利伽羅峠で平氏軍を撃破	俱利伽羅峠の戦い
寿永 3 年 (1184)	富樫家経、木曾義仲に従い京へ行くが、源義経に敗れ加賀に戻る	
文治 3 年 (1187)	源義経一行、京から奥州へ逃れる途中、弁慶が富樫の館に立ち寄ると伝わる	源義経、兄頼朝によって京を追われる
建久 3 年 (1192)		源頼朝、鎌倉幕府を開く
承久 3 年 (1221)	上皇方の林氏が衰退、幕府方の富樫氏は勢力拡大 富樫氏、京の治安維持に活躍	鳥羽上皇、鎌倉幕府追討のため拳兵 (承久の乱)
永仁元年 (1293)	富樫家尚、永平寺 (福井県) から徹通義介を招き、野々市 (本町1丁目付近) に大乘寺を開く (加賀で最初の禅寺)	
元応 2 年 (1320)	富樫泰明、加賀守護の代理として白山本宮を参拝	
元弘 3 年 (1333)		鎌倉幕府が滅亡
建武元年 (1334)		後醍醐天皇、建武の新政を開始
建武 2 年 (1335)	足利尊氏、富樫高家を加賀の守護に任命 (富樫氏最初の守護)	足利尊氏、武家政治を行うため拳兵したが、九州へ敗走
建武 3 年 (1336)	富樫高家、九州筑紫・多々良浜の戦いで勇敢に戦った尊氏七騎の一人と伝わる	足利尊氏、多々良浜 (福岡市) の戦いに勝利
暦応元年 (1338)	富樫高家、尊氏の側近として室町幕府の誕生に尽力	足利尊氏、室町幕府を開く
貞和元年 (1345)	足利尊氏、富樫氏春 (高家の子) を富樫新庄 (野々市市新庄付近) の地頭に任命	
貞和 2 年 (1346)	富樫家善 (押野殿)、大乘寺に押野荘の土地を寄進	
観応元年 (1350)	富樫高泰、富樫氏出身の大乘寺第三代明峰素哲の供養のため、大乘寺に高安軒 (野々市市本町1丁目付近) を建立	
応安 2 年 (1369)	富樫昌家 (氏春の子、北朝方)、越中 (富山県) の桃井勢 (南朝方) を野々市で撃退	
至徳 4 年 (1387)	富樫昌家没。斯波義種が加賀守護に任命され、この後 27 年間支配	
明德 3 年 (1392)		南北朝合一
応永 21 年 (1414)	富樫満春と富樫満成、斯波義種の失脚により半国ずつの守護に任命	
嘉吉元年 (1441)	富樫教家 (満春の子)、將軍足利義教の怒りにふれ、弟の泰高が守護に 將軍義教の死で、教家と泰高兄弟が守護をめぐる争う (富樫一族内紛)	赤松満祐、將軍足利義教を殺害 (嘉吉の乱)
嘉吉 2 年 (1442)	管領畠山持国、富樫成春を守護にして父の教家を復権させたが、守護であった富樫泰高が抵抗し、翌年に争いが起こる	
文安 2 年 (1445)	管領細川勝元が富樫泰高を守護に復帰させたが、再び富樫一族が争ったため、勝元、富樫成春 (北加賀半国) と泰高 (南加賀半国) を半国守護とすることで争いを収める	
長祿 2 年 (1458)	赤松氏、神璽 (天皇の印) を奪回した功績によって北加賀半国の守護に 富樫教家、泰高、協力して赤松氏に抵抗し北加賀の各地で争いを起こす	
長祿 4 年 (1460)	富樫泰高、南加賀半国の守護を富樫成春に譲るが、成春の死により 3 年後に復帰	
寛正 5 年 (1464)	富樫泰高、隠居して富樫政親に南加賀半国の守護を譲る	
寛正 6 年 (1465)	將軍足利義政、後花園天皇の仙洞御所で花見の宴を行い、この時新作の能『安宅』が上演されて安宅の関に「富樫」が登場	
応仁元年 (1467)	富樫政親、大乱当初は西軍 (山名方) であったが、將軍義政の勧めで東軍 (細川方) に加勢	応仁・文明の大乱 (1467 ~ 77)
応仁 2 年 (1468)	富樫政親、赤松氏が播磨の領地 (兵庫県) を取り戻して帰ると、加賀一国の守護に	
文明 3 年 (1471)	富樫政親、弟幸千代と対立。越前の朝倉孝景により幸千代が加賀守護に 蓮如が吉崎御坊 (福井県) を開き、北陸に浄土真宗の教えを広める	
文明 6 年 (1474)	富樫政親 (本願寺派) と弟幸千代 (高田専修寺派) が争う (文明の一揆) 政親、勝利して守護に復帰するが、本願寺派は大きな力を持つ	
文明 7 年 (1475)	本願寺派の一部、富樫政親と争いを起こしたため責任を取り蓮如は吉崎を退去	
長享 2 年 (1488)	富樫政親、將軍足利義尚の近江六角氏討伐に出陣したが、兵糧米や兵を国に求めたことで、加賀で大規模な一揆が起こる 政親、高尾城に立てこもるが、富樫泰高が総大将の一揆方の攻撃を受けて、自害 (長享の一揆) 泰高、政親の葬儀を大乘寺で行い、翌年、守護に	長享の一揆
享祿 4 年 (1531)	富樫種泰 (泰高の孫)、本願寺派の内乱から起こった争い (享祿の錯乱・大小一揆) に敗れ越前に逃走	
元亀元年 (1570)	富樫晴貞 (種泰の次子)、將軍足利義昭の命により織田信長に加勢したため一揆方から攻撃。晴貞と子の祖雲和尚は伝燈寺 (金沢市) で討死 晴友 (晴貞長子)、越中小杉 (富山県) に逃れ小杉と名を改め、後に前田利長に仕える	織田信長、本願寺 (一向一揆) と 10 年に及ぶ戦い (石山合戦) を始める
天正 2 年 (1574)	富樫泰俊 (種泰の長氏)、子の種春・天易侍者が越前で加賀一向一揆方と戦い、金津城で自害。 宗俊 (泰俊の三子)、越前から逃れ、後藤弥右衛門と名を改め押野に居住	
天正 8 年 (1580)		織田信長軍、一向一揆勢を撃破

2. 富樫氏の館

富樫館跡 押野館跡 (市指定史跡)



Googleマップ

【富樫館跡の概説 野々市市住吉町 235 - 2】

富樫館跡は、加賀の武士団富樫氏が築いた館で、室町時代以降、加賀国の守護に任ぜられたことから、国内の政務を司る守護所でもあったと考えられます。

館の詳細な場所については長く不明でしたが、平成6年（1994）に野々市市住吉町地内で発掘調査を行ったところ、館の周囲を囲む堀の一部がみつかりました。

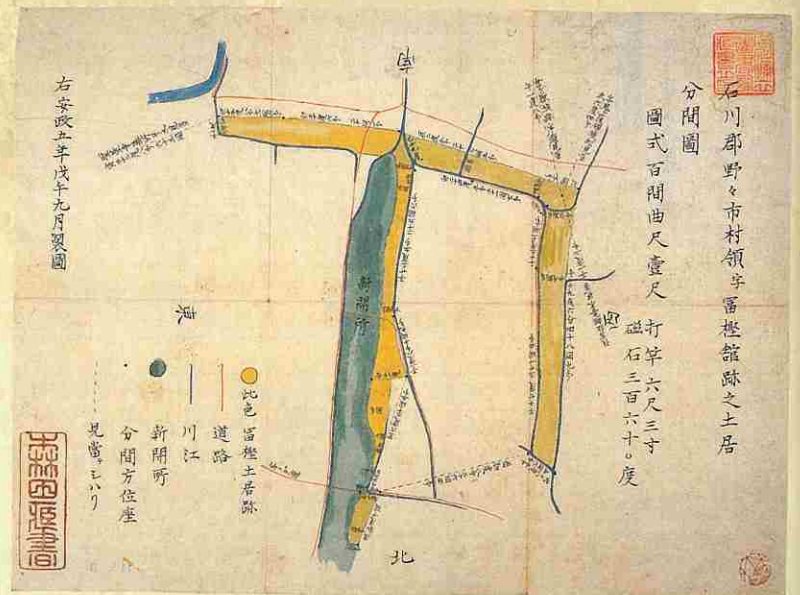
堀の規模は上幅6～7m、下幅約1m、深さ約2.5mのV字形をしており、その隣には堀を掘った土砂で築いた土塁があったようです。

堀の中からは室町時代～戦国時代前半の土師器や珠洲焼、瀬戸焼、中国製青磁器などの日常雑器や直径約5cmの銅製鏡が出土しています。

安政5年（1858）の『富樫館跡絵図』（石川県立図書館蔵）には当時の館の様子が描かれています。絵図には、館の周囲を囲む土塁が描かれており、その規模からこの館は一辺約100～120m四方の広大な敷地であることがわかりました。



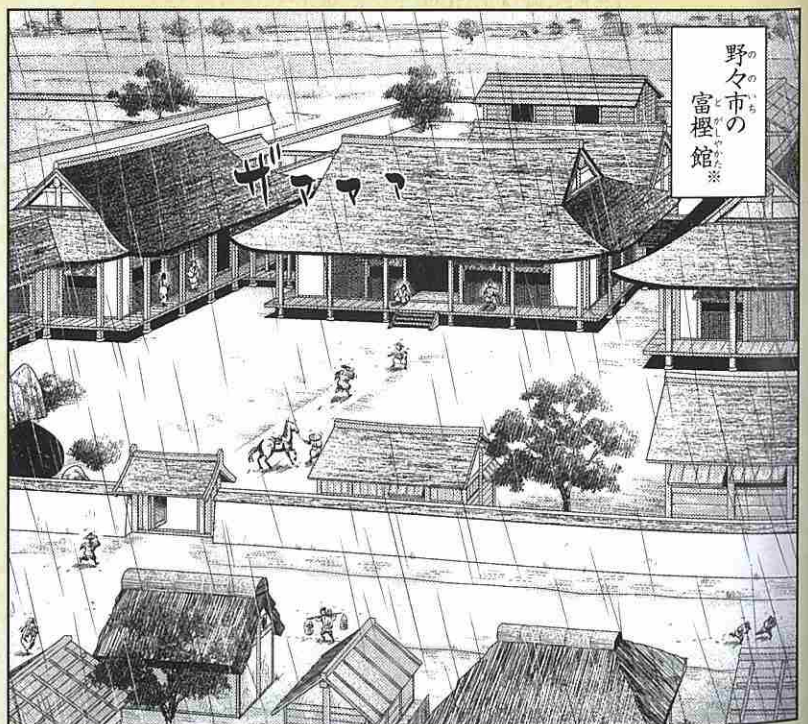
現在の広場の様子



富樫館跡絵図（石川県立図書館所蔵）



富樫館跡位置図



富樫館跡の想像イラスト（宮前洋介氏 画）
富樫氏頌徳会『八曜の剣 加賀・富樫氏の物語』2016年より



発掘調査で見つかった堀跡



出土した日常雑器（碗、甕、播鉢などの食器や貯蔵具）



富樫館跡から出土した銅鏡（背面）

堀の中からは、日常雑器（右上写真）のほかに、直径約5cmの手のひらに収まるコンパクトな鏡の完形品が出土しました。

鏡面裏の中央には亀、その上には二羽の鳥が対となって飛んでいます。



押野館跡位置図

【押野館跡の概説 野々市市押野3丁目166】

押野館跡は、建武2年（1335）に加賀国守護となった富樫高家の弟・富樫家善の館で「押野殿」と呼ばれていました。

過去の発掘調査では、館の周りを囲む堀、館内の施設である掘立柱建物や井戸跡などがみつかり、土師器皿や瀬戸焼の壺、珠洲焼の播鉢など日常雑器が出土しています。

文化8年（1811）頃に加賀藩士湯浅弦斎が描いた『押野館跡図』には当時の館の状況が描かれており、一部には土塁が残るなど、江戸時代終わり頃まで館の名残がみられたようです。



Googleマップ



押野館跡出土の瀬戸焼壺（14世紀）



館を囲む堀跡

3. 富樫氏の城

高尾城跡



Googleマップ



コジョウ堀切



コジョウ切岸と堀切



コジョウ曲輪



コジョウ堀切



野々市の富樫守護所が
危機に陥ったとき
防御の要となるのか
「詰め城」

館から東2キロの
山に築かれた
高尾城

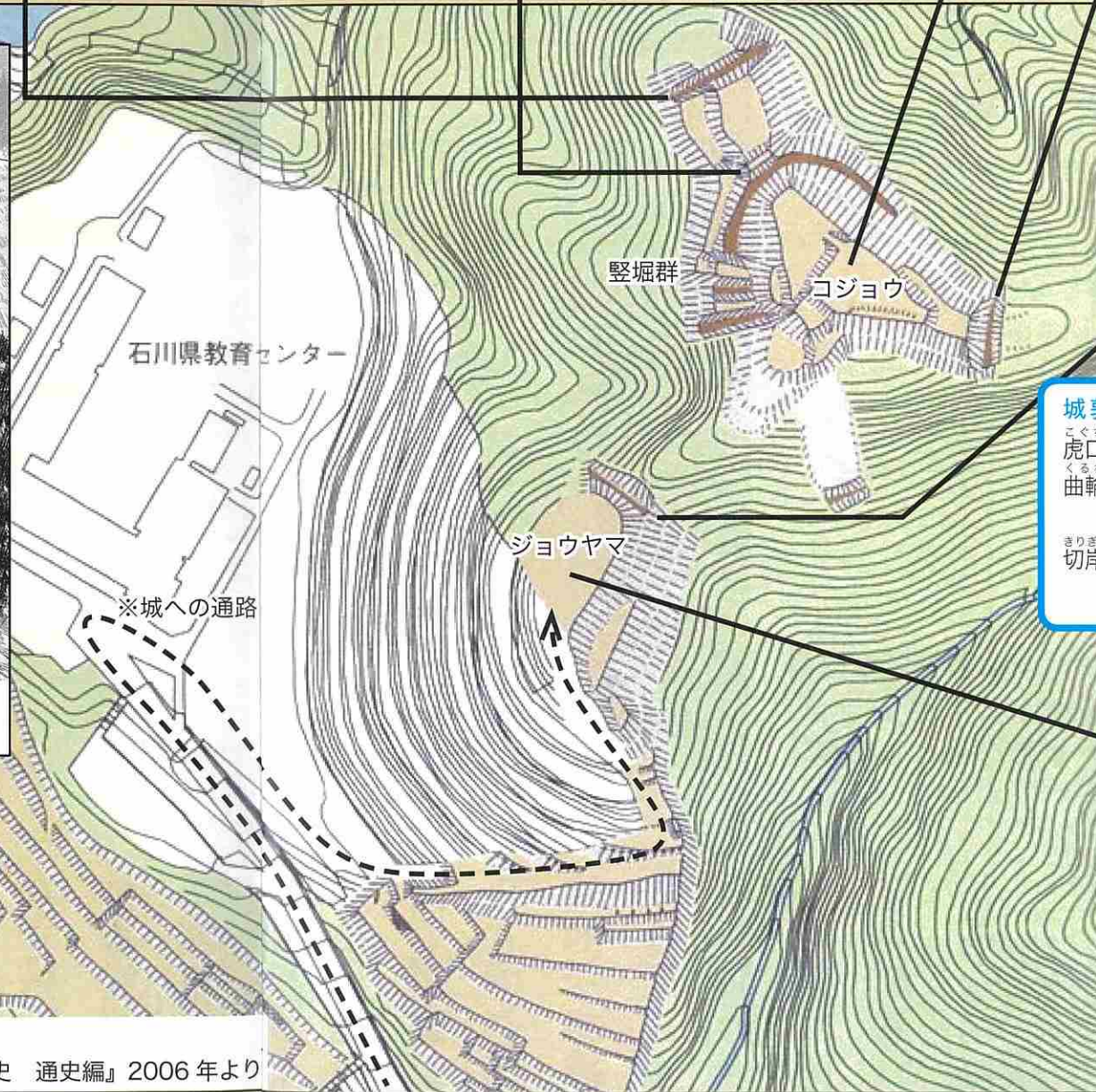
宮前洋介氏 画 富樫氏頌徳会『八曜の剣
加賀・富樫氏の物語』2016年より



高尾城の位置



現在の高尾城 通称「ジョウヤマ」はすでに取り壊され、往時の姿はわからない



城郭用語

こくち 虎口：城の出入口	ほりきり 堀切：尾根筋をV字状に切断し、敵の移動を封鎖
くるわ 曲輪：人工的に造成した平地、兵の駐屯地	たてぼり 堅堀：敵の斜面移動を封鎖するために曲輪や斜面地に設けた堀
まりまし 切岸：曲輪の周囲の斜面を造成し急傾斜とした斜面	



ジョウヤマ曲輪

平成21年に「高尾城址見晴台」として登山道が整備されました。春にはジョウヤマの斜面が桜の絨毯となります。

高尾城跡 縄張図
野々市町『野々市町史 通史編』2006年より



高尾城跡出土遺物 (石川県埋蔵文化財センター所蔵)

高尾城周辺の史跡

【筑紫的場神社 金沢市高尾台1丁目的場公園】

富樫高家が九州筑紫で勝利を祈願した宇佐八幡神社の神が飛来した所で、この地に神社が建てられた。現在、東南方約800mにあった高尾社に移転合祀され禪ヶ峯神社と改称しました。



Googleマップ



4. 富樫氏の墓

御廟谷 (県指定史跡)



Googleマップ

【①御廟谷 金沢市額谷町】高尾城の南麓、山あいにある御廟谷は、富樫氏の累代の墓所と伝えられています。地形は四段に分かれ、上段の「寺屋敷」と呼ばれる位置には、石材が散在し、その下段には五輪塔一基を中心とする石塔がみられます。「寺屋敷」は富樫一族の居館跡とも、家臣金子氏の居館跡とも伝えられ、伝承そのものは必ずしも一致していません。

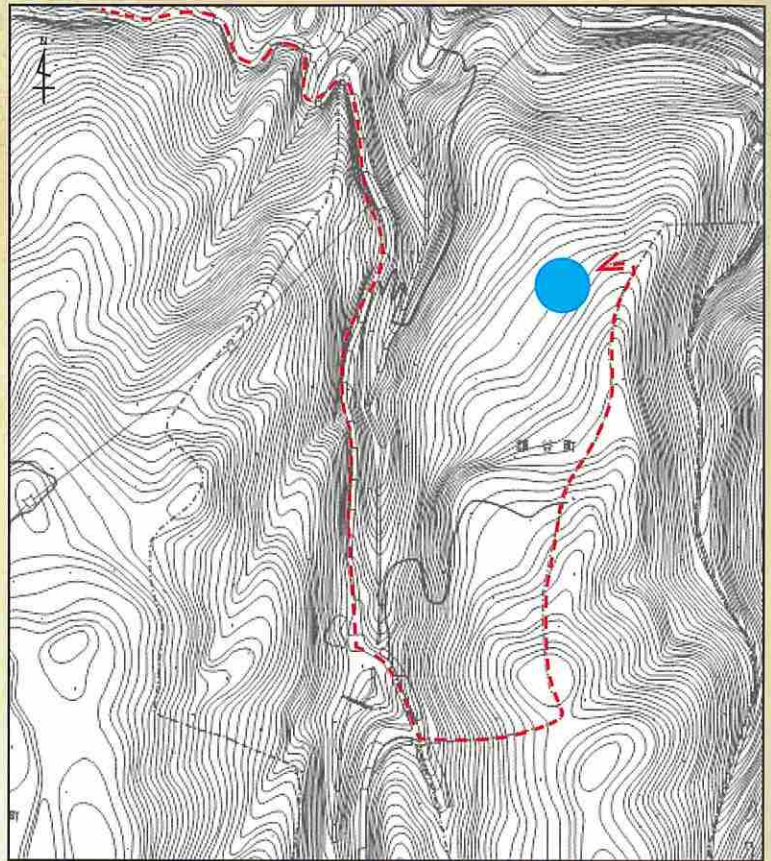
昭和60年『石川県の文化財』より

【石塔群】中央の五輪塔は、高さ90cmを測り地輪と空風輪に比べて火輪が大きく不安定です。石材は凝灰岩で元は個別の五輪塔の部材と考えられています。左側の石塔は、高さ66cmを測り、不正形な方形石の上に水輪、隅飾りの欠けた宝篋印塔の笠を重ね、欠損した相輪を据えたものです。右側の石塔も同様の部材をくみ上げたものです。石造物が置かれた墳墓の盛土は、一辺が4.7m、高さ1.65m、方形を呈しています。これらの石塔群はいずれも中世後期（15世紀代）に属していますが、石塔の各部材を集積したものです。

【金沢市南部の石造物群】金沢市南部地区には御廟谷以外に、高尾城の西方、かつて「寺下」と呼ばれた地点で五輪塔などの石塔が採集されたほか、四十万八幡神社では五輪塔の部材が、額新保町集会所では地蔵半跏坐造や五輪塔や宝篋印塔の部材等が確認されています。中世後期の石造物がこの地区に数多く確認されていることから富樫氏に関連する一族の墓地があったと推定されています。



御廟谷の石塔群



御廟谷の地形図と石塔群の位置 ※破線は探訪ルート



御廟谷の位置

※地図中の番号は本文中の番号に一致



Googleマップ



石仏 (②額新保集会所)

金沢市額新保2丁目123-1



Googleマップ



五輪塔 (③四十万八幡神社)

金沢市四十万町り63-1

4. 富樫氏の墓

富樫晴貞墓地



Googleマップ

【伝燈寺 金沢市伝燈寺町八 179】臨済宗妙心寺派寺院、宝亀山と号し、延慶元年（1308）に開山にしたといわれています。加賀の五山派の有力寺院となったが、その後、実質的に河北郡一向一揆の影響下に置かれました。元亀元年（1570）織田信長勢に内通を謀って追われた富樫晴貞が当寺で自害しました。

【富樫晴貞墓地】富樫晴貞はまたの名を小次郎と呼ばれ、伝燈寺町の共同墓地と同じ尾根にあります。墓域は東西4.5m、南北5.2mのほぼ正方形の平坦面に築かれています。

墓塔は向かって右側に富樫塔、左奥には昭和25年に建立された五輪塔があります。

富樫塔は高さ138.3cmを測る。塔は下から基壇、台座、塔身で構成されており、塔身は方柱状で頭部を三角形に尖らせています。

【銘文】元亀元年夏五月十四日卒

葬於河北郡傳燈寺邑山下

〈中央〉六世祖富樫小次郎君之墓

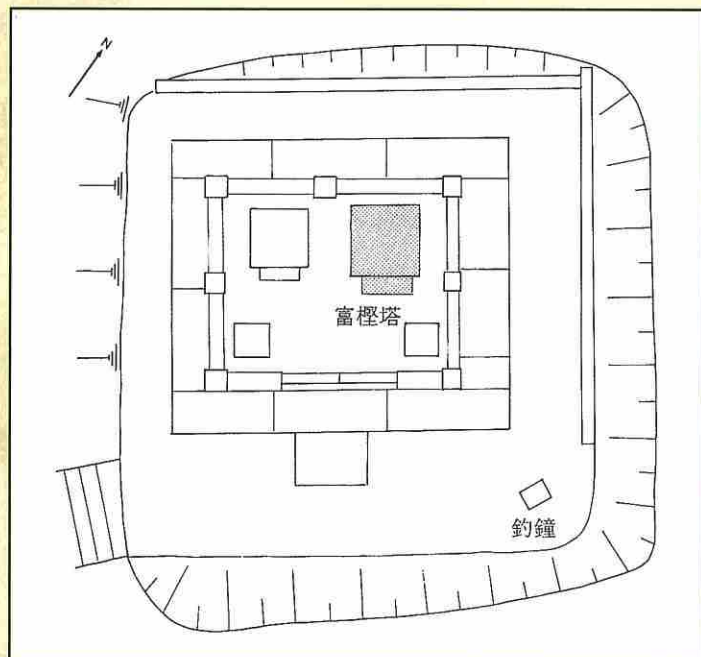
天明三年癸卯十月改建立

後裔小杉喜左衛門口謹口

※小杉家は晴貞の長子 晴友系で晴貞死後、越中に逃れ、小杉と名を改めました。



富樫晴貞墓地



富樫晴貞墓地略図

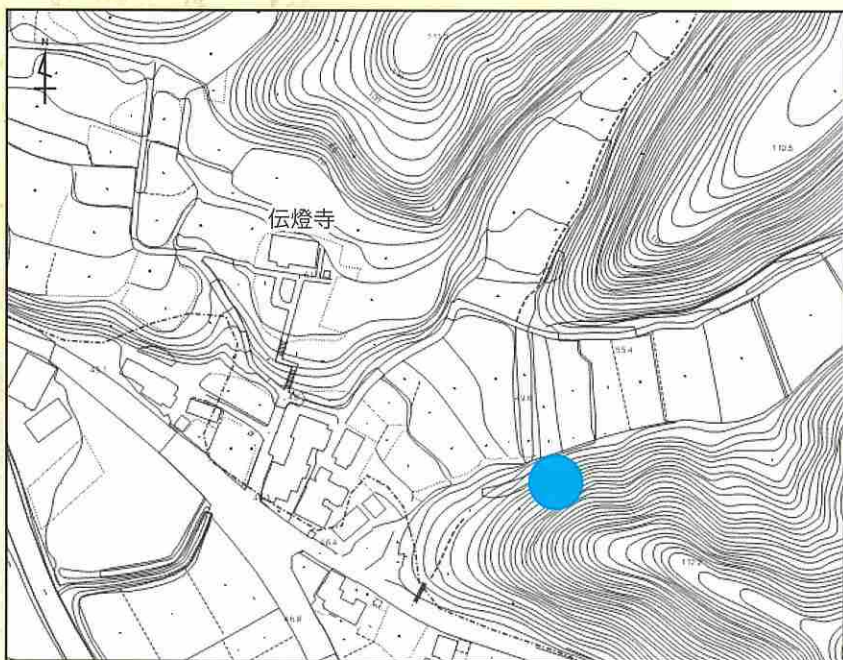
傳燈寺関係歴史史料調査団『加賀伝燈寺—歴史資料調査報告—』



伝燈寺町の富樫晴貞墓地



伝燈寺



伝燈寺と富樫晴貞墓地の位置

5. 富樫氏の家臣

槻橋氏の城館跡



Googleマップ

【槻橋氏の概説】 槻橋城跡を築いたとされる槻橋氏は、出自や系譜は不明ですが、現在の白山市月橋を拠点とする有力な国人(在地武士)と考えられています。室町時代には加賀国の守護であった富樫政親の側近として仕え、槻橋氏が北加賀郡(河北・石川両郡)に所領があったことから守護代の立場であったとも考えられています。

近世史料『官知論』には、富樫政親の側近の侍に槻橋近江守重能の名がみられ、幼いころより、政親に忠誠を尽くし、荒屋村(現・白山市荒屋町)を賜わったと記載されています。また、長享2年(1488)の加賀一向一揆では、政親とともに自害した武将の中に槻橋近江守をはじめ、槻橋三左衛門・槻橋式部丞など槻橋一族の名があります。近世史料『白山諸雑記』には、「三位ト云家老」が兵糧を預けておいた月林村の山城が、一揆のために陥落したと伝えています。



槻橋城の位置 ※地図中の番号は本文中の番号に一致



槻橋城跡(正面の山中に城、下に槻橋氏館の推定地)

【③槻橋神社 白山市月橋町】 富樫政親の家臣槻橋氏が「御蔵山」に城を築き、その麓に社を構え信仰したと伝えられています。江戸時代の記録には、「槻橋城内には富樫氏の米蔵があり、焼けた米が土の中から出てくる。」「正中2年(1325)富樫氏より奉納米がある」と書かれています。



Googleマップ



槻橋神社



青白磁 梅瓶
(公財)石川県埋蔵文化財センター提供

【②月橋遺跡 白山市月橋町】 月橋遺跡は、鶴来街道沿いで発見されました。発掘調査では石組の堰のある溝や小穴が発見され、遺物は室町時代前半を中心とする土師器皿、越前焼の甕、青白磁の梅瓶の蓋が出土し、槻橋氏の館の一部の可能性が考えられています。



Googleマップ



堀切



主郭



槻橋城跡 縄張図
御蔵山活性化委員会 作成



曲輪



城への登り口

【④倉ヶ岳城跡 金沢市倉ヶ岳町】 倉ヶ岳は、馬の鞍を置いた形から名付けられた山といわれ、中腹には大きな池が水を湛えています。長享2年(1488)一向宗門徒との攻撃に敗れた守護富樫政親は、城を築いたこの山に逃げ、馬に乗ったまま城から池の中に落ちて果てたという言い伝えが残されています。倉ヶ岳城は、山頂から延びる尾根上に複数の平場を造り、その平場を囲うようにして、周りに土塁を巡らせています。



倉ヶ岳遠景

【市指定史跡 ①槻橋城の概説 白山市月橋町ソ60-1】

槻橋城跡は、手取川扇状地を西にのぞむ山の中腹部、標高225mに位置し、城跡の真下には、鶴来街道があります。城の規模は北東から南西170m、北西から南東へ170m。城跡のある山稜は、「御蔵山」や「蔵山」と呼ばれ、炭化米が出土していたことから米を貯蔵する蔵があったという伝承があり、「お蔵山」と呼ばれるようになりました。また、加賀国守護の富樫氏の兵糧倉があったという説もあります。

城は中央の谷を挟んで、西と南に延びる尾根に築かれています。山陵上部には26m×15mの規模をもつ主郭(曲輪)があり、その周囲には土塁が巡っています。

主郭北東には背後の尾根を遮断する大きな堀切が見られます。主郭から西側に延びる尾根には、複数段の曲輪と土塁が構築されています。

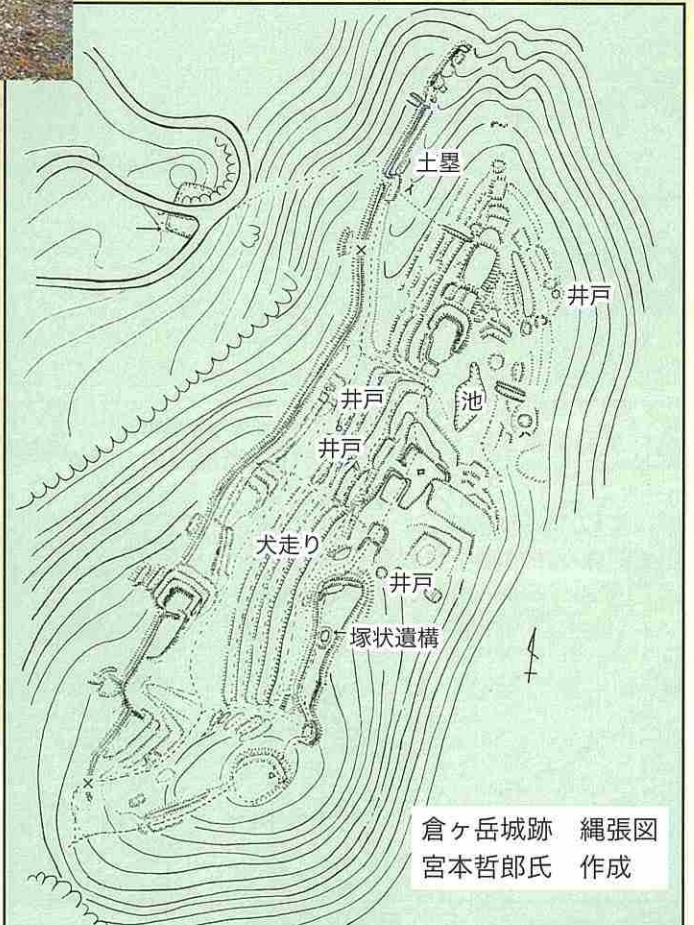
主郭より南側の尾根には長さ30mの2条の土塁が南東方向に延び、その周囲には1辺2~3m、深さ50cm程の方形の窪みが随所に確認できますが、防御のための装置かどうかは不明です。

6. 伝富樫政親の終焉の地

倉ヶ岳城跡



Googleマップ



倉ヶ岳城跡 縄張図
宮本哲郎氏 作成

富樫氏関連遺跡など (野々市市エリア)

【①野々市市郷土資料館(旧魚住家住宅)(市指定文化財)】

野々市市本町3丁目19番24号

旧魚住家は、安政年間(1850年頃)に石川郡村井村字樋爪(現在の白山市)に建てられた農村の商家で、現在は移築され、野々市市郷土資料館として利用されています。

館内は、旧魚住家住宅を利用して昔の家の様子を再現しているほか、昔の農具や生活道具を展示しています。また富樫氏に関する資料パネルや、富樫館跡から出土した遺物なども公開されています。



Googleマップ



【②住吉の宮(市指定史跡)】

野々市市本町2丁目

住吉の宮(現布市神社)は、康平6年(1063)(一説には寛弘6年(1009))に富樫家が野々市に居館を構えた際、敷地内に社殿を造営したことが始まりとされています。

境内には『富樫氏先業碑』があります。これは、富樫氏の事跡を後世に伝えるため、明治22年(1889)に野々市村の優れた営農家である水毛生伊余門が建てたものです。碑文には、富樫氏のはじまりから政親が一向一揆によって滅ぼされるまでの約500年の事跡が刻まれています。

他にも、推定樹齢約500年の『大公孫樹』(市指定天然記念物)、源義経が奥州へ向かう途中、富樫の館にて家来の弁慶が余興に放り投げたと伝わる『弁慶の力石』もあります。



Googleマップ



【⑤富樫館跡 石碑(市指定史跡)】

野々市市本町2丁目

富樫館跡の石碑は、昭和42年(1967)に金沢工業大学と富樫卿奉賛会(現富樫氏頌徳会)が富樫館の存在を広く知らせるために北陸鉄道石川線野々市工大前駅横に建てたものです。

石碑の裏には『富樫氏歴代の居館したところ富樫城とも言い九艘川と新兵衛川を外濠とした区域である』と刻まれています。



Googleマップ



史跡等位置図

※地図中の番号は本文中の番号に一致

【③水毛生家住宅（市指定文化財）】

野々市市本町3丁目11番14号

水毛生家は家譜によると富樫氏の末裔で、天正15年（1589）野々市に移り住んだとされています。

近世の主要街道の旧北国街道沿に建つ水毛生家住宅は、表構えは切妻妻入りとなる農家の形、内部の間取は町家の形となっており、通りに面するミセノマの屋根は江戸時代特有の板葺屋根造りの緩い勾配となっています。

明治10年（1877）頃には主屋を京風の数寄屋造りに建て替えており、茶室・庭・土蔵が一体となった「茶の湯」のための空間が形成されています。 ※通常、非公開



Googleマップ

【④大乘寺跡】

野々市市押野・本町・横宮町周辺

大乘寺は、富樫家尚と僧澄海が永平寺（現福井県）より徹通義介（1219～1309）を招いて永仁元年（1293）に開いた加賀国最初の禅寺で、加賀守護を務めた富樫氏の菩提寺でもありました。

創建当初の大乘寺の範囲は、野々市市押野・本町・横宮町周辺と推測されます。

本町1丁目には、1350年（正平5）に富樫高泰が大乘寺第4代住持の明峰素哲を祀るために開いた寺「高安軒」があり、大乘寺旧址の石碑が置かれています。（本町1丁目232番）

大乘寺は江戸時代には加賀藩前田氏の支援を受け、金沢城下に移転・再建され、現在は金沢市長坂町にあります。



Googleマップ

【野々市市ふるさと歴史館】

野々市市御経塚1丁目182番

野々市市内の遺跡から出土した縄文時代～江戸時代の遺跡の紹介や発掘調査でみつかった遺物などが展示されています。

富樫高家の弟・家善の館である押野館跡の発掘調査でみつかった遺物をはじめとして、富樫氏に関するパネルや資料、他の中世遺跡の遺物などが紹介されています。



Googleマップ



野々市市ふるさと歴史館位置図

石川中央都市圏 全体図



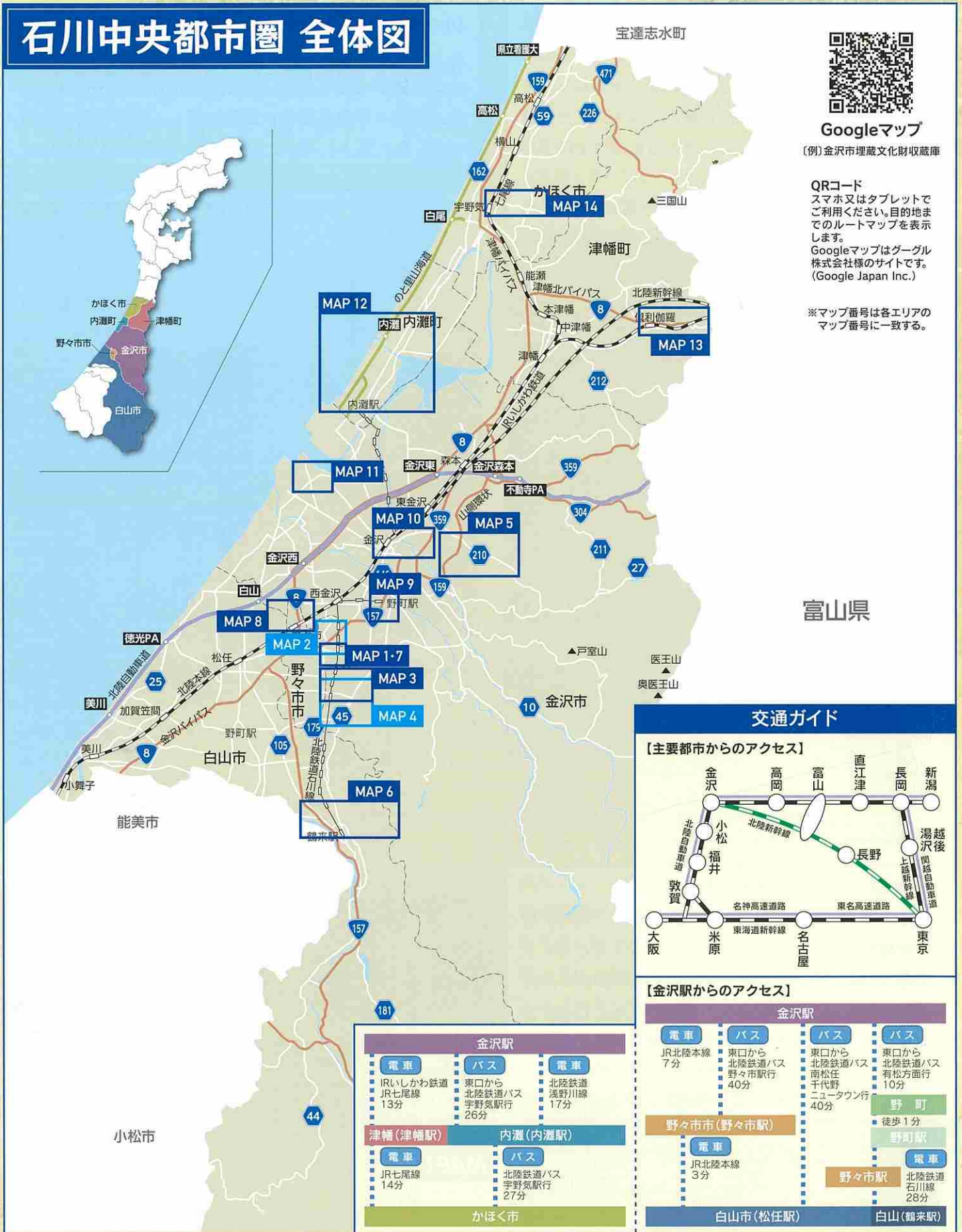
Googleマップ

(例) 金沢市埋蔵文化財収蔵庫

QRコード

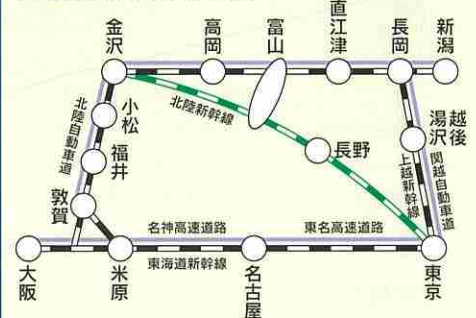
スマホ又はタブレットでご利用ください。目的地までのルートマップを表示します。
GoogleマップはGoogle株式会社様のサイトです。(Google Japan Inc.)

※マップ番号は各エリアのマップ番号に一致する。



交通ガイド

【主要都市からのアクセス】



【金沢駅からのアクセス】

金沢駅		
電車	バス	電車
IRいしかわ鉄道 JR七尾線 13分	東口から 北陸鉄道バス 宇野気駅行 26分	北陸鉄道 浅野川線 17分
津幡(津幡駅)	内灘(内灘駅)	
電車	バス	
JR七尾線 14分	北陸鉄道バス 宇野気駅行 27分	
	かほく市	

金沢駅			
電車	バス	バス	バス
JR北陸本線 7分	東口から 北陸鉄道バス 野々市駅行 40分	東口から 北陸鉄道バス 南松任 千代野 ニュータウン行 40分	東口から 北陸鉄道バス 有松方面行 10分
野々市市(野々市駅)	電車		野々市駅
JR北陸本線 3分			徒歩1分 野々市駅
白山市(松任駅)			電車 北陸鉄道 石川線 28分
			白山(鶴来駅)

※本書は、石川中央都市圏（金沢市、白山市、かほく市、野々市市、津幡町、内灘町）が地域資源の魅力向上に向けて県域内の歴史遺産の保存活用に連携して取り組む事業として作成したものである。

【協力】 石川県立図書館、(公財)石川県埋蔵文化財センター、金沢市伏見台公民館、富樫氏頌徳会

【発行】 金沢市文化財保護課 【編集】 石川中央都市圏歴史遺産活用連絡会 【発行日】 令和3年3月31日発行

【お問い合わせ】 金沢市埋蔵文化財センター 金沢市上原南60番地 TEL076-269-2451 Fax076-269-2452